

プロローグ 婚約破棄そして捨てられる

「お前との婚約は、破棄だ」

広間のざわめきが止まった。公爵の低い声だけが、やけに響く。それは……
あまりにも唐突で、青天の霹靂とも言える出来事だった。

「なっ……」

「理由は簡単だ。お前のような取るに足らぬ女は、公爵家の名を汚すだけだ」

「待ってください！ 私は……お慕い申し上げておりました！」

「うるさい！ もう決めた。私はもっと相応しい女と結婚する」

会場がざわめく。だが、そのざわめきは同情ではなく、面白がる笑いだった。

「……そんな……」

「飾りにすぎなかったんだ、お前は。見た目だけの女だ」

それを聞いて、私の父が頭を下げる。

「申し訳ありません公爵様。私の育て方が悪かったのです」

「まあいい。もう代わりはいる」

なんと……そこに、見慣れない女が現れる。見慣れぬ黒髪に、黒い瞳の人。

「彼女は、この世の不浄を取り去るべく現れた聖女である」

話には聞いた事がある。その能力が故に、王家に取り上げられて聖女になっ

た町娘だとか。浄化の能力があり、魔獣などを衰退させる力を持つらしい。

「どうも」

愛らしい人ではあるが、私とは一切目を合わせようとしなかった。この人が、私の立場を奪った人。そして公爵様は、その女をグイッと引き寄せた。

「この女こそが、我に相応しき相手だ！」

「おおお！！！！」

パチパチと拍手までされており、皆の視線は聖女に向いた。
すると隣りに立っていた兄が、冷たく吐き捨てる。

「役立たずが、町民風情に負けて」

私は父母をみて、震えながら必死に声を絞る。

「お父様、お母様……お願いします、何か……」

母は目を逸らし、誰も私を見ない。足元が崩れ落ちる感覚だけがあった。突然の出来事に呆然とし、そして私たち家族は強制退去させられた。

その夜。

家に戻ると、さらに酷い追い打ちが待っていた。

「恥さらしめ！ もうお前の部屋などない。出ていけ！」

「まってください！ お父様！ 私は！ 行くところなど！」

「勝手に野垂れ死ぬがいい！ 町人の娘に負けるなど！ あってはならぬ！」

父の声は冷たい。

「そんな……お金も持たずに……」

「必要ない。どうせ戻ってこないのだから！」

「お父様！ す、捨てないでくださいまし！」

「うるさい！」

「お母さま」

母は終始、目を背け続け、私を見なかった。そして私は、従者に連れられて門の前に立たせられる。すると兄が門を開け、突き放す。

「二度と帰ってくるな！　クズが！」

門扉が閉まる音が、心臓の奥まで響く。

「嘘……おにいさま……」

白いドレスのまま、私は泣きながら夜の石畳を一人歩く。行く当てなどない、生きる力もない。途方にくれた迷子の世に、ただ街をさ迷い歩いた。

「……誰か……助けて……」

返事はない。凍える夜気だけが頬を刺す。

その時。

「……おい、君」

闇の中から低い声。振り向けば、黒い外套の男が馬上から見下ろしていた。

「その格好で……何があつた？」

「……」

「寒いだろう」

馬を降りて外套が肩にかけられる。温かさがじんわり広がった。

「名を聞いてもいいか？」

「……」

「答えたくないならいい」

優しい声が、凍った胸を少し溶かす。

「歩けるか？」

差し出された手に導かれ、馬上へ。外套の中で体が震えを止める。それから、森の中の別荘に着くと、暖炉と香木の香りが迎えてくれた。執事が出て来て、主の指示を待っている。

「いかなさいますよう。お館様」

「湯と食事を用意しろ」

「御意」

そして私は毛布にくるまれ、温かいスープを飲む。涙が溢れ泣きながらも、私は目の前の男に聞かねばならなかった。

「……なぜ、私を？」

「危険な夜に、女を放っておくやつがいるか？」

彼はそれだけ言って背を向けた。逞しい背中が、言葉以上に私を守ってくれている気がした。それが、私と彼との初めての出会いだった。

第一章 辺境へ

翌朝、外は霧が深く立ち込めていた。庭で従者たちが馬車を整えている。扉が開き、昨日の男が入ってきた。

「私は領に戻る。君は……どうする？」

「……ここに残ることも？」

「できるが、王都に行かされるだろう」

「……それは嫌です」

「なら、私と来い。私の領地だ。王都からは遠いが、安全だろう」

その声音は、決して拒めない響きを持っていた。

「……はい。お願いいたします」

私と彼、そして従者が馬車へ。両脇には騎士たちが馬で並走する。向かい合ったルシェーエルが、低く名乗った。

「私の名はルシユール。それだけ覚えておけ」

「はい」

「長い旅になる。だが、君はもう追われない」

その言葉を信じたい気持ちと、信じられない気持ちが胸でせめぎ合った。

……突然助けてくれたこの人は、一体何者なのだろう？　きっと何かわけが

あって私を助けたような気もするが、ただの気まぐれだったのかもしれない。

それから、数日かけて王都を離れていく。次第に道は荒れて、広大な景色が広がった。夜は焚き火を囲みながら、短い会話を交わす。

「辺境は厳しい土地だ」

「ルシューエル様……私に合いますか？」

「君は、見た目よりずっと強い。大丈夫だろう」

その一言が、妙に胸を温めた。いくつもの峠を越え、眼下に領地が広がった。

雪山と川、そして石造りの荘厳な城館。

「ようこそ、私の領地へ」

領民が彼に手を振り、慕われているのがわかる。都市は思ったよりも、かなり大きく彼が普通の貴族でないと分る。城につくと、そこは広く温かった。

「今日からここが君の家だ。くつろげ」

「あ……ありがとうございます」

案内された南向きの部屋からは森と山が見えた。重しが外れるような安堵。それから半日はゆったりと過ごさせてもらった。食事もちちんと用意されて、私は生きる事を許されたような気がした。

そして、その夜。湯殿で温まっていると、扉越しに声がする。

「湯加減はどうだ？」

ルシユーエルだった。

「はい、とても気持ちよくて申し分ないです」

「そうか……今夜は話をしよう。後で部屋に来なさい」

「……はい」

風呂をでて、私はローブを羽織り、ルシユールエルの部屋を訪れる。暖炉の炎。机の上には黒い布に包まれた何か、前にルシユールエルが座って、私を見ている。

「良く来てくれた」

「はい」

どっちにしろ行くあてもないし、あのまま野垂れ死ぬか奴隷にでもなるしかなかった。だから、私は彼の命令を聞くしかない。

「これを見せてくれ」

ルシューエルがテーブルの上に置いてある布を外すと、古い魔刻文字が刻まれた金属が淡く脈動していた。見た事も無い、不思議な魔道具らしきもの。

「これは……？」

「古代魔刻具。からだを拘束し、感覚を研ぎ澄まし……力を引き出す」

彼の視線が、私に逃げられないほど深く刺さる。私は、つい不安になって、一歩後ずさってしまふ。

「怖がるな。これは君を傷つけるためではない」

「そうなんですね？」

彼が私の手首を取る。そしてその古代魔刻具という金属が手に触れた瞬間、冷たさと熱が同時に走る。

「あの夜、君を見た時……特別な力が見えた」

「そんな……私は何も……」

「だぶん、君は気づいていないだけだ」

「だから私を……？」

「可哀想だからだけじゃない。もちろん、情もあつたがな」

胸の奥に、不安と熱が入り混じる。

「これを嵌めればわかる。……服を脱げ」

もう抗う言葉は出なかった。どうせ、私はこの人の元でしか生きる道はない。
私はローブを脱ぎテーブルに置く。男の人の前で、服を脱ぐのは初めてだった。
猛烈な羞恥が襲うが、言う事を聞くしかなかった。

「よし、それじゃあこっちにこい」

私がそこにいくと、ルシユールが私の手首にその一つを、カシヤンと取り

付けた。それに取り付けられると、なぜか体の感覚が研ぎ澄まされていく。

「どうだ？」

「なにか、ハッキリと自分を感じます」

「そうこれはそう言う道具だ」

手首、足首、腰と拘束されるたび、体の奥で何かが目覚めていくのを感じた。全部が体にはめられた時、シュッとその道具から、鎖がとびでて私の体を四方に引っ張る。体が浮かび上がり、裸なのに大の字で空中に留まった。

「う、うう、恥ずかしい」

「恥ずかしいがな。お前は美しい」

ただでさえ、人前で服を脱いだことなど無いのに、事もあるうに、裸で大字になり四肢が開いている。体を全開に広げて、空中に拘束されているのだ。

「こ、こわい」

「大丈夫だ。恐ろしいことはせん」

ルシユーエルの低い言葉は、私をほんの少し落ち着かせるのだった。

第二章 調教

ルシューエルの部屋で、私は裸で大の字に浮かぶ。胸も股間も隠す事が出来ずに、かるく恐怖の表情を浮かべていた。

「……動けない……っ」

「古代魔刻具だ。お前のために用意した。本当は敵を拘束するのに使う」

「何を……」

「これからわかる」

金属の冷たさが手首に食い込む。そして、私の裸を見て彼が言った。

「それにして美しいな。顔だけでは無かったか」

「いや、見ないでください」

「恥ずかしいか？ ほら……もうなにかを感じているだろう？」

魔刻文字が淡く輝きを増し、心臓の鼓動と同じリズムで脈動した。震えが、皮膚だけでなく奥深くまで響き、呼吸を乱していく。

「なに、これ……変です……」

「まだ始まりにすぎない。君がどこまで耐えられるのか、確かめるとしよう」

耳元で囁かれた瞬間、全身に戦慄が走った。怖さと期待が入り混じるような、感覚に私の身体は、自分の意思とは無関係に震え続ける。

「本来は、自白させたり、拷問で使ったりするものだからな」

その言葉でさらに怖くなる。

「拷問……」

「まあ、敵兵などのな」

彼の視線が私を捉え、テーブル上の銀色で丸い器具をゆつくりと手に取る。

「逃げられない。わかっているだろう？」

確かに身動き一つとれなかった。逃げたいのに、こんな事止めてほしいのに、心の奥が、身体の内が、熱く疼いている。

彼の手が私の乳首へと忍び寄る。

くりゅ
♡

「んあ
♡♡」

尖った乳房の先端をルシユールにつままれた瞬間、体がぴくんと動いた。

「うああ」

「どうだ、感覚が研ぎ澄まされているだろう」

「ふぁっ……はい……」

そして銀の玉を私に見せて言う。

「これは、振動の魔道具だ」

彼は、それを私の尖った乳首につけた。

ブン……。

「ひあっ」

乳首から細かな振動が走る。じわじわと波が押し寄せ、体が勝手に反応した。

「ほら……感じている」

振動の魔道具が、ジンジンと乳首を刺激する。

「うあ♡ ああ♡」

振動魔道具の、振動のリズムがゆっくりと確実に深くなっていく。

「あっ、だめ……そんなに……っ　痺れるう！　んっはあ♡♡」

言葉にならない叫び声が漏れる。だけど……身体はもっと求めているみたい。
振動の魔道具が微妙に震えを変え、尖った乳首をブルブルと震わせ続けている。

「あっ♡　だめ♡　乳首が♡♡　あっ♡」

そしてルシユールが、確かめるように私の乳首を触る。

「凄く硬くなったな。よっぽどいいらしいな」

「び、敏感にな……て……ああ……」

「古代魔刻具が効いてるな」

熱くそしてじわじわと焦らすように、乳首の愛撫は丹念に丹念に続けられた。それからルシユールは振動の玉を体に這わせ、次第に私の股間に下りていく。

「ほら、もっと深く、震えていいぞ……」

ぴと。

その振動の玉は、私の股間の……敏感過ぎる肉芽に付けられた。

「ふあああああ……」

ゾクゾクぞく……。

逃げ場のない官能の檻に囚われ、私は声を震わせる。肉芽が凄く敏感になつていて、その振動が体中に電気を走らせた。

びんびんびん！

「やっ……やめて……いや……」

だが、その言葉はルシェーエルに届かない。肉芽の震えが腰の奥底まで届き、脳までじわじわと侵食していく。